

心理學における二三の科學論的問題について

末 永 俊 郎

心理學は心的事象を含めてすべての行動を一義的に導き出すことを許すやうな概念體系の建設を究極的理想とする。その目的のためには經驗的諸事實の抽象的分類をすて、力學的構成概念の樹立へとすゝまなければならぬであらう。理論心理學に於ては、現在既にその様な轉向が行なはれつゝある。かゝる理論心理學の建設への方向に積極的な努力を傾むけてゐる人たちの主要なる一人はクルト・レヴィンである。彼の理論は科學論的な反省に於ても、その理論の實驗的適用に於ても、多くの重要な成果を心理學に齎らした。以下彼の理論の科學論的な側面を検討して、そこに含まれる若干の問題について考察してみたいと思ふ。

行動を一義的に導き出すためには心理學的事象を支配する法則を見出さなければならぬ。即ち如何なる條件の下に於て如何なる心理學的事象が生ずるかといふこと

が決定されなければならない。これと相表裏して重要なことからは、特定の行動が生ずる際の特種條件、即ち當面の事態の特種性質を知ることである。法則とは事象又は事態の相異なる諸特性間の函數關係をきめるものであつて、具體的な事態の力學的諸要因から現實の事象を導き出す原理に外ならない。レヴィンによれば行動Bは人又は生活體Pとその心理學的環境Eとを含む全體事態Sの函數である。この全體事態Sはまた生活空間とも呼ばれる。行動は生活空間の函數として理解されるのである。この關係は $B=f(S)$ 又は $B=f(P, E)$ として表はされるであらう。行動はその營まれる場の性質と獨立な本能の如きものによつて生ずると見られるのでなく、本能的といはれる如き行動すらも、その際の場の状態によつて規定されるといはなければならぬ。しかしながら環境が一方にあり、人又は生活體の性質として豫め與へられてゐる傾向といふやうなものが他方にあつて、人

又は生活體と獨立な環境が、環境と獨立な人又は生活體の傾向をあらはれやすくしたり、あらはれにくくしたりするといふのではない。人又は生活體とその環境とはユクスキユルも主張してゐるやうに相互依存的な非獨立的部分として全體事態又は場を形成し、いはゞ機能的圓環 (Funktionskreis) の二つの項として理解されるのである。人又は生活體とその環境とは従つて何れも非獨立的な變數である。この様な關係は心理學的全體事態又は生活空間が一つの力學的體系であることを豫想する。それはしかし物理學的世界の如き意味での單數的體系ではない。心理學は唯一つの、心理學的に實在する諸事實の連結空間を取扱ふのではない。生活空間は問題の個體に效果をも一限りにおける諸事實の全體に外ならない。それ／＼の個體の生活空間は互に全く分離した多數の世界であつて、各個體の生活空間はいはゞそれ／＼物理學的世界の全體と力學的に等價的な全體であるとみられるのである。心理學的世界はかやうな全體として境界を持つ有限の閉ぢられた領域である。心理學的法則はこの境界の内の世界に於てのみ支配するといはなければならぬ。この境界外の世界には心理學的法則以外の法則が支配し、心理學的世界の「外からの」影響は唯この境界點のみに及

ぶ。心理學的世界に及ぶ「外からの」影響は従つて間接的であるといはなければならぬ。

しかし、我々は心理學的世界の力學を取扱ふ場合、それが間接的にしろ常にこの世界の「外からの」影響に曝されてゐることを無視することが出来なう。縦ひ心理學に於て嚴密な決定論が假定され、以前の事態とあらゆる心理學的法則の完全な知識が得られたとしても、心理學的生活空間の力學からは導き出すことの出来ない變化が存在することを認めざるを得ない。物理學的變化はすべて同一の物理學的空間における條件又は變化の結果であるといふ意味に於て、力學的に閉ぢた體系として取扱ふことが出来る。物理學に於ては物理學的空間へ、その空間の「外からの」影響が及ぶことはない。心理學的世界はこの様な意味に於て力學的に閉ぢた體系ではない。では、かやうに力學的に閉ぢてゐない體系でありながら、その中に於ける事象の一義的な導出が如何にして可能であらうか。レヴィンによれば力學的心理学の課題は、特定の瞬時に生活空間に存在する心理學的事實の全體から特定の個體の行動を一義的に導き出すことである。この様な事實の全體中には、部分的にその存在を生活空間の外的事象に負ふところの、境界點の諸事實も、その瞬間

に於て個體に影響を及ぼす限りすべて含まれてゐる。生活空間 S は特定の瞬時に於ける S であつてその限り S は充分恒常的でありうる。その場合には B は S の一義的な函數として表現出来るといふのである。従つて、その限りでは物理學に於けると同じく心理學に於ても生起する變化は同一空間内の條件又は事象の結果である。ところで今、 S を特定の瞬時に限らないで多數の瞬時に對應する S 、即ち $S_1 S_2 S_3 \dots$ を考へると、それらは時間を経過に於てそれ／＼の瞬時に對應するところの事態を表はすであらう。これらを獨立に取扱つて、それ／＼に對應する行動 $B_1 B_2 B_3 \dots$ を一義的に導き出すことは、原理上常に可能である。しかしある瞬時の S_1 からこれと異なる瞬時の S_2 を導き出すことは常に可能であるとはいへない。 S_1 の知識が完全であり、また心理學的法則として f なる函數が完全に知られたとしても、 S_1 から S_2 を導き出す可能性は原理的に保證されてゐない。物理學に於ては S_2 を S_1 から導き出すことを許す充分に包括的な S_1 を選ぶ可能性が原理的に存在してゐる。心理學の世界に於ては S_1 から心理學的法則に従つて結果する事象 B_1 の繼續する間に、それ自身として事態 S_1 から演繹出来ないある事象がこの世界に入り

來る可能性が常に存在してゐる。これは心理學的世界が力學的に「閉ぢてゐない」ことの必然の歸結である。ところで、このことは理論心理學を建設するにあつて充分考慮されねばならない重要な二つの科學論的問題を含んでゐると思はれる。その一つは心理學における歴史的過程の取扱ひに關する問題であり、他の一つは心理學的世界「外から」の影響の取扱ひに關する問題である。

レヴィンは體系的問題と歴史的問題との峻別を要求し、彼の力學的心理学の課題を、主として、また第一に前者の解決の中に見てゐる。體系的問題といふのは問題となつてゐる事態の力學的關係から事象を導き出すことに關するものである。この場合、事象の原因はその瞬時の事態の力學的特性にたちかへつてあつづけられる。これに反して歴史的問題とは特定の事態が如何なる仕方であるか、その歴史的問題とは特定の事態が如何なる仕方であるか、その歴史的發展に關するものであり、事象の原因は個體とその環境との歴史に溯つて分析される。在來の心理學におけるこの二組の概念及び問題の混同は兩者の峻別を主張する人たちの要求を正當ならしめるのであるが、この事によつて心理學における歴史的問題の重要性が減するわけではない。無論

歴史的繼起の力學に關する問題ですら、個々の事象がそれぞれに如何なる力學的依存關係を示してゐるかを洞察すること、すなはち $B = f(P, E)$ なる等式をそれ／＼の場合について決定することなしには充分に答へることが出来ない。しかしそれだけでは不充分であつて特に發達の問題、又は精神病學における病氣の發生の問題を理解する上に於て歴史的問題を取扱ふことは不可缺であると思はれる。力學的心理学の課題を主として體系的問題の處理といふことにおいてゐるレヴィンも歴史的問題の心理学における重要性を看過してはゐない。しかし、この問題を力學的心理学の問題として充分に取扱ひうる有力な概念體系を展開してゐるとはいへない。このことは力學的心理学に於て原理的に歴史的處理が不可能であることを意味するのであらうか。或は特定の制限内に於てはこの問題の處理が許されるのであらうか。この様な問題に近づく豫備的な手續として、行動に對して效果をもつ歴史又は時間の問題を考察しておきたいと思ふ。

さきに生活空間 S は特定瞬時における心理學的全體事象であることをのべたが、このことは行動に效果を及ぼす諸事實がその特定の瞬時に「現在の」に存在するもの

として定位されることを意味しない。われわれは過去の思出をもつて居り、未來への希望を懐いてゐる。われわれの世界は現在存在してゐないもの方向にも擴がつてゐる。かゝる意味では過去や未來がわれわれの行動に影響を及ぼしてゐる。この様な事情から、行動の原因を過去に求めるもの (*causa efficiens*) と未來に求めるもの (*causa finalis*) とが對立して問題を紛糾させた。しかしこの場合にいふ過去、現在、未來の時間的指標 (*temporal index*) は、結局現在の事態に效果をもつ諸事實の内容がそれぞれの時間的指標に關係してゐることを意味するにすぎない。思出とか追憶とかいはれるものも現在の生活空間の中に含まれてゐる事實の過去への關係づけをあらはすにすぎないことは明らかであり、希望とか目的とかといふものもこの意味に於て現在の生活空間の外にあることがらではない。従つてこの様な意味における歴史又は時間は現在又は特定瞬時の生活空間の力學によつて充分處理されうる。

これと幾分異なつた仕方では歴史が現在の行動に影響する場合がある。その一つは認識構造の變化を通じて過去の事象がいはゞ間接的に現在に及ぶ場合である。例へばメイヤーのしるぬずみの「推理」に關する實驗に於ては、

被験動物に豫め幾つかの單獨經驗が與へられ、これが特定の問題の解決に際してどの様な効果をもつかといふことが検討された。この實驗に於ては經驗を操作することによつて、ある時には問題の解決が生じ、またある時には生じないことが明らかにされた。問題の解決は一般に問題の事態に關する認識構造の變化によつて生ずると考へることが出来るが、この様な特定の認識構造は異なつた過去の經驗によつて、異なつた方向に成立するといはねばならない。實驗心理學の若干の問題に於ては明確な事態を設定するためにこれに先立つ幾つかの事態を操作してこれを歴史的に展開させることが不可欠であつて、かやうな歴史的過程の力學は少なくとも技術的には既に應用されてゐるとみななければならぬであらう。

しかし理論心理學の立場に於てはこの問題の處理は未だ充分なる見透しを得てゐないと思はれる。特定時の事態 S_1 が充分に恒常的である限り、時間的経過は生活空間の力學にとつて原理的な困難を提起しない。その範圍内では $S_1 S_2 \dots$ の各項を S_1 に等しいと置いて一義的に B を導き出すことが可能である。しかし例へば認識構造の變化が S_1 と S_2 との間に介在するとき場合には、 S_1 から S_2 を一義的に導き出す道は絶たれる。

心理學に於ける二三の科學論的問題について

従つて S_2 に對應する行動 B_2 を S_1 の分析から一義的に導き出すことは出来なくなる。生活空間の力學にとつてこの問題はむしろ原理的な困難であると思はれる。歴史的過程の力學の問題を如何なる仕方て解決するかは理論心理學に課せられた今後の問題であるといへよう。

- (1) J. v. Dethli u. O. Krisatz, Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen, Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten, 1934.
- (2) こゝに「閉ぢられた」領域といふのはトポロギイ的な意味に於てであつて、後にのべるやうに力學的に「閉ぢられる」ことを意味しない。
- (3) N. R. F. Maier, Reasoning in White Rats, Comp. Psychol. Monogr. 6 (1929)
- (4) 生物學に於ける血統 (Pedigree) の發生關係の如きもの形式的にこれと同じ様な問題を含んでゐると思はれる。

第二の問題は第一の問題と密接に關係してゐる。さきの問題は事態 S_2 が事態 S_1 の分析によつて必然的に結果しないことから生じた。その困難の原因は心理學的世界の力學的開放性といふところにあつた。心理學的世界のこの同じ特性から第二の問題が生ずる。即ち事態 S は少くとも部分的に心理學的世界の「外から」の影響を受ける。この様な影響は行動の一義的な導出を目ざす心理

學に於て無視することが出来ない。心理學はこの問題を如何なる仕方で處理すべきであらうか。

レヴィンは生活空間の諸事實を概括して準物理的・準社會的・準概念的の諸事實群に分類しうることをのべてゐる。彼によれば生活空間の諸事實は「客觀的」物理的、社會的及び概念的諸事實に直接對應するのではなく、特定時の個體の行動に効果をもつ限りでの諸事實を含むものである。「準」(quasi-)と云ふ語は「客觀的」諸事實とこの様な意味に於て區別される諸事實に對して與へられる。しかし、一方これら心理學的諸事實の構造は「客觀的」な物理學的諸事實或は社會學的諸事實の構造に極めて高度に依存してゐる。「客觀的」諸事實の變化は屢々、生活空間の變化を惹起する。他方行動は心理學的生活空間の法則に従はぬ生活空間の「外の」領域にも影響することが出来る。こゝに心理學の世界と心理學「外」の世界との相互影響を認めることが出来るが、かやうな相互の交渉の問題を心理學に於ては如何なる仕方であり扱ふべきであるかといふ問題が解決を要求してゐると思はれる。

生活空間への「外から」の影響は知覺を通して認識構造の變化としてあらはれる場合と必ずしも知覺を通さず

に「粗大體性的」(Gross somatic) 影響としてあらはれる場合とがある。例へば石が落ちてきて人が傷ついたり、意識を失つたりする場合である。この様な影響が生活空間に及びうる可能性を形式的に取扱ふことは必ずしも困難でない。例へば心理學外からの影響は心理學的生活空間のある部分にのみ及ぶか、或はその空間のあらゆる點に及ぶかの何れかであると考へられるから、生活空間の内部の點と境界の點とを區別することによつて、影響が一部に及ぶときはその部分がトロポギー的閉鎖領域の境界であると考へればよい。空間のあらゆる點に影響の及ぶ場合にも原理的にはこれと同様に取扱ふことが出来る。すなはち生活空間よりも一次元だけ多い空間を考へれば生活空間の各點はこれに對して境界點になると考へられる。生活空間がたとひ次元をもつてあらはされるとしても、このことは數學的に可能である。しかしこれは生活空間を、トロポギー的に閉じてゐて、力學的に閉じてゐない領域として取扱ふことの可能性、及び心理學「外」的影響が境界點を通して間接に及ぶといふことを考慮に入れて、その限りで心理學「外」的影響をとりあつかつたにすぎない。心理學に於て具體的な行動の力學を理解するためには、心理學「外」的影響をたゞこの

様な範圍に於て、この様な仕方でのみ取扱ふことは少くとも不充分である。特に問題を社會心理學の分野に求めると、成員をその下位部分とする集團全體の力學は、成員の行動を理解する上に於て決定的な重要性をもつ。トルマンは幾分ちがつた文脈に於てあるが、同じ様な趣旨のことがらをのべてゐる。彼は行動を一義的に導き出すために心理學者が操作する獨立變數なるものが常に相互に聯關する社會的場の一部分として他の獨立變數に影響し、嚴密な意味では「獨立」變數として取扱ひ得ないこと、たとひ數々の獨立變數を相互に分離することが或程度成功したとしても最後に得られる個人の行動の法則は特定の文化の中に於てしか妥當しえないことをのべてゐる。普遍的に妥當する純粹心理學はかくて彼によると結局この様な影響に比較的左右されない、單純な生物學的條件の下にある諸事實を取扱ふ動物心理學の如きものになるわけであるが、この結論の當否はともかくとして、心理學「外」的要因の取扱ひは特に社會心理學の如き分野を問題にする限り心理學に於ても無視出來ない重要性をもつことは繰返ししるまでもない。こゝで問題になるのはむしろ如何にそれを取扱ふかといふことであらう。集團乃至社會的場の力學が生活空間の力學とどの様な關

心理學に於ける二三の科學論的問題について

係になるか、社會的場の力學が生活空間の力學に如何なる仕方では影響するかといふ理論的問題はレヴィンに於ても充分の概念的連續性をもつて取扱はれてゐない。彼に於ても集團の力學又は社會的場の力學が顧慮されてゐないのではない。むしろ反對に彼は心理學的問題の社會的側面を重要視することに於て特徴的であるのみならず、そのトポロギー的概念を集團及び社會學の諸問題の取扱ひに適用することの有効性を實證することに努めてゐる點に於ても極めて異色ある存在である。しかし彼に於ても、心理學「外」的要因としての社會的場の力學と生活空間の力學との關係の問題が充分に論理的な觀點から取扱はれてゐるとはいへないのである。

彼は最近發表した勞作の中で、社會心理學研究の概念と方法をのべてゐる。彼によれば社會心理學的實驗の有効性は場の中の孤立的事象や單一的個體の特性の取扱ひ如何によつて判斷さるべきでなく、主として全體としての社會的集團又は社會的事態の特性が適切に表現されてゐるか否かによつて判斷さるべきであるとされる。すなはち社會心理學に於ては、事實を發見し、また觀察するにあつて全體としての場の特性について信すべき資料を提供することが第一の仕事であるといふのである。

この場合の「場」が個人の生活空間の場ではなく、社會的場であることはいふまでもない。この様な立場から、彼は社會心理學的實驗を指導し、諸事實を社會學的概念枠と心理學的概念枠との二重の枠組に關係づけて分析することにより、社會的行動の透徹した理解へと進んでゐる。われわれの指摘した問題は従つて、この分野に關する限り少くとも實驗的には困難を提起することなしに超えられてゐるかにみえる。しかし科學論的にみれば諸事實を關係づけた概念枠は水準の異なる二重の枠組であつて、一方から他方を導き出すことはせいゝ間接的對應關係を手がかりにするほかないと思はれる。兩者を連續的に關係づけるためには何らかの意味での「轉換式」が必要なのではないだらうか。

- (1) 知覺過程の如きも、例へば光線の影響による「體性的」(sonatic)な變化を意味するが、これと異なり更に Stress な物理的變化によつて及ぶ「體性的」影響は、これを前者と區別してかく呼ぶことが出来るであらう。
- (2) n 次元の空間の各點は $n+1$ 次元の空間に對しては境界點になると考へられる。

(3) E. C. Tolman, *Physiology, Psychology and Sociology*, Psychol. Rev. 45 (1938).

(4) K. Lewin, *Field Theory and Experiment in Social Psychology: Concepts and Methods*, Amer. J. Sociol. 44 (1939).

(5) R. Lippitt, *Field Theory and Experiment in Social Psychology: Autocratic and Democratic Group Atmospheres*, Amer. J. Sociol. 45 (1939). 曾註し、其の譯文を 44. R. Lippitt, *An Experimental Study of Authoritarian and Democratic Group Atmospheres*, Univ. Iowa Stud., Stud. in Child Welfare, 1940, 2, No. 1.